

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(5年計画の 3年度目)

1. 研究課題

(和文) 日本・アジアにおける差異の表象

(英文) Representations of Differences in Japan and Asia

2. 研究代表者

(氏名) 竹沢 泰子

3. 研究期間

平成 22年 4月 から 平成 27年 3月 まで

4. 研究目的 (400字程度)

本研究の目的、人種の表象と社会的リアリティについて、とくに日本・アジアに焦点を当てて考察することである。人文科学のみならず自然科学をも射程に含め、分野横断的な研究体制をとる。人種は、概念としては生物学的実体がないことが近年の遺伝学研究などで明らかにされているが、医療、社会制度、美意識にいたるまで、強固に社会的リアリティをもっている。何がどのようにこのようなリアリティを生み出し維持させているのだろうか。その鍵を表象に求め、そのしくみに光を投じることが本研究の狙いである。

欧米の人種表象の研究では、視覚的な表象に関しては膨大な研究の蓄積が存在するが、日本やアジアにみられる「見えない人種」についての、非視覚的な表象にかんしては研究例が多いとは言えない。「汚い」「臭い」「怖い」といった生活感覚で語られる差異。非可視的でありながら、強固に語られ続ける「穢れ」「血が違う」などの言説。日本や東アジアなどの地域に顕著に見られる、こうした「見えない人種」の社会的リアリティを創り出す表象のしくみを炙り出すことに重点をおきたい。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

合計39名(うち学内10名、他大学29名)から構成される全国共同利用・共同研究の趣旨に沿う研究班でもって、平成24年4月から平成25年3月までの間に全17回の国際シンポジウム・国際セミナー・研究会を実施した。4月13日にはVelina Hasu Houston教授(南カリフォルニア大学)を、6月9日にはCatherine Ceniza Choy教授(カリフォルニア大学バークレー校)を招いて、国際セミナーを行った。6月10日には、被差別部落の表象についての研究会を実施した。7月13日には、ミックスルーツ・ジャパンとの共催により、国際セミナー「「ハーフ」・「ミックス」として日本に生きるーラベリングとアイデンティティー」を開催した。7月28日には、公開座談会「Nikkei Studies and Beyond: Dialogue between Scholars in Japan and the U.S.」を行った。9月18日にはStephen Murphy-Shigematsu教授(スタンフォード大学)とMary Yu Danico教授(カリフォルニア州立工科大学)、Lon Kurashige教授(南カリフォルニア大学)を招いて、アジア系アメリカ人に関する国際セミナーを行った。10月13-14日、2月23日、3月13-14日には、若手研究者を中心に「Crossing Boundaries: Art and History」と題した国際ワークショップ・研究会を実施した。本共同研究の最大の成果の一つとして12月15日と16日に国際シンポジウム「人種神話を解体する」を国立京都国際会館で行い、述べ350名以上が参加し

た。翌17日には、登壇者と研究会メンバーで集まり、専門家会議を開いた。1月26日には在日朝鮮人と日本人の間で生まれた「ダブル」の民族経験について、1月31日には在日日系ブラジル人の経験について研究会を開催した。

6. 研究成果の概要（400字程度）

研究成果は多岐にわたるが、とくに共同研究班の予算を用いて実施した共同研究の成果について述べたい。2012年10月に実施した「Crossing Boundaries: Art and History Part I」では、若手研究者が中心となり企画報告を行った。日本のアーティストと北米の日系人アーティストおよび若手研究者の報告を通じて、自らの経験や身の周り、そしてそこに埋もれかけている記憶を題材に越境的なテーマを脱領域的に表現する試みの可能性と課題が明らかになった。これは、表象する側と表象を受容・解釈する側が交流する機会ともなった。また、この発展版として、2013年2月にPart IIを、3月にPart IIIを開催した。これらでは、歴史的事実と映画に着目して人種表象による差異の構築とその越境に関する議論を発展させることができた。そして、2012年12月に実施した国際シンポジウム「人種神話を解体する」では、「invisibility 見えない人種の表象」「knowledge 科学と社会の共生産」「hybridity 「血」の政治学を越えて」という三つの部会それぞれについて、活発な議論が交わされ、2014年に出版する論集の議論が明確になった。

7. 共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など）

1. 平成24年10月13日（土）

Crossing Boundaries in Art

企画：渡辺紀子（科研研究員）後藤千織（科研研究員）

場所：京都精華大学 Kara-Sスタジオ

参加アーティスト：岡本光博、Jeff Chiba Stearns、Shizu Saldamando、高田智美

コメント：菅野優香（北海道大学）

2. 平成24年10月14日（日）

Crossing Boundaries in History

企画：渡辺紀子（科研研究員）後藤千織（科研研究員）

菅野優香（北海道大学、元科研研究員）

場所：京都大学人文科学研究所

司会・進行：菅野優香

報告者：竹内里欧（椋山女学園大学）、後藤千織、渡辺紀子

3. 平成24年12月15日（土）

国際シンポジウム「人種神話を解体する」

場所：国立京都国際会館

・第1部 Invisibility—「見えない人種」の表象

報告者：Takashi FUJITANI (University of Toronto)、斉藤綾子（明治学院大学）、金 仲 燮（慶尚大学）、Ariela GROSS (University of Southern California)

司会：関口 寛（四国大学）

コメント：宋 基燦（大谷大学）

・若手リレートーク／ポスターセッション「日本で人種・エスニシティを研究すること」

報告者：岡村兵衛（神戸大学）、鶴戸 聡（日本学術振興会）、佐藤丈寛（琉球大学）
山本めゆ（京都大学）、中村理香（成城大学）

司会：南川文里（立命館大学）

4. 平成24年12月16日（日）

国際シンポジウム「人種神話を解体する」

場所：国立京都国際会館

・第2部 Knowledge—科学と社会の共生産

報告者：日下 渉（京都大学）、Arnaud NANTA (Centre National de la Recherche Scientifique)、石井美保（京都大学）、竹沢泰子（京都大学）／加藤和人（大阪大学）
／太田博樹（北里大学）

司会：坂野 徹（日本大学）

コメント：松原洋子（立命館大学）

・第3部 Hybridity—「血」の政治学を越えて

報告者：ダンカン・ウィリアムズ（南カリフォルニア大学）、成田龍一（日本女子大学）、
高 美智（立教大学）、工藤正子（京都女子大学）

司会：川島浩平（武蔵大学）

コメント：貴堂嘉之（一橋大学）

5. 平成25年2月23日（土）

Crossing Boundaries: Art & History II

場所：京都大学人文科学研究所

報告者：大浜郁子（琉球大学）、平井克尚（京都大学）

6. 平成25年3月13日（水）

Crossing Boundaries: Art & History III

場所：京都大学人文科学研究所

報告者：菅野優香（北海道大学）、板倉史明（神戸大学）、池田淑子（立命館大学）、志
村三代子（早稲田大学）

7. 平成25年3月14日（木）

Crossing Boundaries: Art & History III

場所：京都大学人文科学研究所

映画上映・討論会

The Crimson Kimono (dir. by Samuel Fuller, 1959)

The Teahouse of the August Moon (dir. by Daniel Mann, 1956)

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区 分	機関数	受入人数		延べ人数			
		外国人	大学院生	外国人	大学院生		
学内（法人内）	5	32	6	12	180	24	48
国立大学	12	26	4	2	119	16	11
公立大学	2	2	0	1	2	0	1
私立大学	22	38	4	10	213	9	38
大学共同利用機関法人	1	1	1	0	1	1	0
独立行政法人等公的研究機関	1	1	1	0	1	1	0
民間機関	4	3	1	0	7	1	0
外国機関	13	17	17	0	33	33	0
その他	3	3	2	0	9	9	0
計	60	120	33	25	562	91	98

研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

(例) ・1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた(参加した場合) : 参加人数2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

(参加研究者がファーストオーサーであるものを対象)

論文数	16	
うち国際学術誌に掲載された論文数	(0)	(0)

※下段の()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載。

(注) 分野の特性を踏まえて、参加研究者がファーストオーサーである場合の他に、コレスポンディングオーサーである場合や指導した大学院生がファーストオーサーになっている場合など、論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合は、その役割を明示の上で論文数を記載。

役割		
論文数		
うち国際学術誌に掲載された論文数	()	()

※下段の()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載。

※ 高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、掲載論文数、そのうち主なものを以下に記載。

※ 拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

(注) インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合は、以下に適切な指標とその理由を記載上で、掲載雑誌名等を記載。
 拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

インパクトファクター以外の指標とその理由			
掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名